相模経済新聞　2020年3月10日号

宇宙生命哲学

ことはじめ

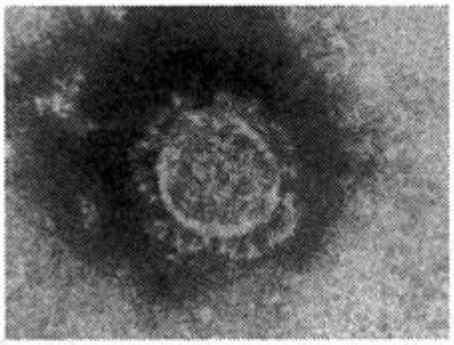
22

北里環境科学センター
名誉顧問／宇宙生命哲学者
伊藤　俊洋

コロナウイルスと放射能（10年目の3・11を目前にして）

新型コロナウイルス（COVID－19）肺炎が、地球規模で猛威を振るっている。中国、韓国、イタリア、イランの一部地域では、集団感染が起こっており、我が国でも北海道が緊急事態宣言を行なった。全国の小・中・高等学校の一斉休校が現実のものとなり、さらに感染が広がると、交通機関や店舗の活動が停止しライフラインが力を失い、国力も疲弊してゆく。まさに、パンデミック前夜の国の姿を彷彿させる。

100年前のスペインかぜの時は5千万人～1億人が命を落としており、日本では約40万人の人命が失われた。当時は第一次世界大戦のさなか、ウイルスの正体がわかっておらず、有効な予防法や治療法がなかったので、大戦による戦死者約900万人の5～10倍もの人が、なすすべもなくインフルエンザの猛威の前に命を落とした。当時の世界人口は20億人弱であったので、実に世界人口の5％の人命が失われたことになる。今回は、原因のウイルスも特定され、医療技術も進化し、情報網も地球規模で完備しているが、まだ不明なことも多く、相手の姿が見えない恐怖の中で、パンデミックが起こるのではないかという不安と緊張感が日に日に増している。我々は稀に見る歴史的な出来事を、目の当たりにしていることになる。



新型コロナウイルス2019-nCOVの電子顕微鏡写真（国立感染症研究所）

我が国は、9年前に東日本大震災とそれに引き続き発生した福島第一原子力発電所の事故という大きな負の遺産を背負っている。さらに、5カ月後には、東京五輪とパラリンピックという世界規模のスポーツの祭典を主催国として開催しなければならない。これらの事業に対して、日本国民は一丸となって、適切な判断と迅速な決断のもとに行動しなければならない。9年前の大津波により甚大な被害を受けた被災地の復旧・復興は進んでいるが、原発の事故現場は、多くの人の懸命な努力にもかかわらず、廃炉への見通しは全く立っていない。この違いは何に由来するのだろうか。

姿が見えない恐怖という点では、コロナウイルスと放射能は共通の不気味さを持っている。新型コロナウイルスの感染は、国際機関の連携で終息に向かうと思われる。次回は、今回のコロナウイルス騒動を踏まえて、コロナウイルスより桁違いに深刻な困難性をはらんでいる福島第一原子力発電所の廃炉への道筋を、近代原子論に基づいて提示してみたい。